

組	氏名	年齢	第二性徴	性に関わる行動	指導方針・手立て	備考
A	中1男	S 50 ・ 9 ・ 5	性器の勃起を認む。 ニキビ 急激な身長 の伸び。	排尿の前に性器をいじり、授業中、勃起した性器に刺激を与える。身体接触を求めなめたり臭いをかぐ。イライラあり。	排せつの指導 声かけをし注意を そらす。 「なめる」ことには 厳しく注意、拒 絶する。	
A	中1女	S 5.0 1.0 1.9	生理なし 乳房の発育 性毛	性器いじり。 身体接触を求め、男 性器にも触りたがる 関心強し。	清潔 排せつの指導 その都度、注意す る。	

特設時間を設けての授業実践の中では、直接、間接に性に対する子供達の反応が得られる。性の話と同じ学部の異性を意識して恥じらいうつむいてしまう者、はしゃいでどンドン意見をだす者、笑いこぼる者、くいいるように裸の絵をみつめる者、個別指導だけでは得られない子供達の性に対する関心の表出である。

今後は教材・教具をいかにわかりやすく視覚的にするか、学習集団構成のあり方をどうするか等、検討を加え授業実践を積みあげていきたい。また、それをうけて個別指導を行っていきたい。今年度は計画しながらも果たせなかった性についての教官と保護者の研修会をもちたいと考える。

4 コミュニケーションの確立

集団社会での社会自立を目指すためには何らかの伝達手段を持つことが必要である。長い目で、それを培い育てていこうとするのが、この指導の目標である。

そのためには、まず、生徒、教師、保護者が、もっと胸襟を開いて話し合い、ふれ合いを深めていくことが大切である。また、課題を持った個別指導も、家庭と連携をとりながら進めていかなければならないと考えている。

各種行事、月1回のPTA、直接の電話連絡の他に毎日の「生活ノート」も家庭との連携を進め、生徒とのコミュニケーションを確立させる大きな役割を果たしている。（「生活ノートからの抜粋」に示す）

子ども達はそれぞれの伝達手段を通して、自分たちをとりまく社会に働きかけをしている。その伝達方法は、ある時には誤解を生じ、トラブルを招くこともあるし、サインという方法であるために周囲から見逃されることもある。また、中学部の段階で、性の発達と同時に従来のサインや行動に別の意味あいが含まれ、伝達手段やコミュニケーションの方法が変わってくる子どもも多い。従って、従来のコミュニケーションのあり方を踏襲するのではなく、改めて、学校生活、家庭生活全般を通して、対人関係、サインの有無等を見直し、新たにコミュニケーションのあり方を問い直す必要がある。細かな生徒の変容に気づくためにも、学校での教師←→生徒の関係を放課後や余暇時間まで広げてふれ合い、対話を多くしなければならぬと考えている。

(生活ノートから) 抜粋

	学校 → 家庭	家庭 → 学校
3/2年 (男)	布しい乾まで でし出 のた た言葉 しん言 でうの 「天の 気ハ」 い室ミ い教室 はを「た 日擦 合摩 たまし	そい ね。あ うりう よなど しぶう で喜ら 「寒一 い緒 「時つ んつを ぶいち たうづ で
3/4年 (女)	直別動 (て)揺 しなを 涙情か にで感 会てに るし達 送対友 をじる 生れる 卒業前 (卒のに 接れか ま	心じ もの 子ども 子、 です。き で下 りした。 通解し の理ま そくい くよ思 全をく
3/9年 (男)	背でい やのて 肩くれ のたさ 達注意 も注 どんに 子ま達 のハも 周子 らハの か他 朝中、 まし	ぶちあ た持つ は気こ のつる くいこ たの情 たつと とほし ン遊す チ「ま バいて を思み 達とて 友んだ

中学部の実践・研究の反省と今後の課題

本校中学部では創設以来、「生活の中で生きて働く力を身につけた子」を育てることを目標に、その指導を行ってきた。そして、本年度は「からだづくり」を通して、「いきいきと行動する子」を目指した研究を進めてきた。短期間のわずかな実践ではあるが、その中で、次のような進歩がみられた。

1. 共同研究に取り組んだため、研究テーマに対しての教官の意志統一が図れた。
2. 科学的認識に立った実態把握の必要性に気づいた。
3. 性、生活リズム、食生活などの問題について、学部懇談を持つ中で、保護者と同一の課題を持って話し合うことができた。それによって、家庭との連携が深まってきた。
4. 体力づくりを考えていく中で、発達段階に応じた指導のあり方を検討するようになった。
5. 教官が、性教育の必要性を感じ、共通課題として取り組んだ。
6. 生活ノートを一日のリズムや家庭での様子を記入できるように改善したため、一人ひとりの実態がより把握でき、学校での指導に生かすことができた。

しかし、まだまだ問題点も多く残されている。まず、「生活リズムの確立」・「食生活の改善」などの問題である。長年の子育ての中で培われた習慣の改善は、短期間に行えるものではなかった。今後も根強い繰り返しの指導を必要とする。また、一人ひとりに個人目標を設定し、教官の個人研究も行ってきたが、4つの柱を中心にした共同研究の形態も取ったため、その分、「個に応じた指導」がおろそかになってきているのではないかと不安の念を持っている。また、朝の活動の体力づくりについての日々の話し合いが十分に持てなく、きめ細かに個に応じた、介助や指導ができなかったということ。性に関する指導では、授業実践の積み上げが足らなかったこと、そして一人ひとりの変容についての話し合いの場が多く持てなかったということである。